
俺の帰宅部生活

ヤシロ ユウイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の帰宅部生活

【Nコード】

N2740V

【作者名】

ヤシロ ユウイ

【あらすじ】

俺の所属する部活は、キタク部。そこは、変な人たちのたまり場だった。そこに入った瞬間から俺のキタク部生活が始まってしまった。

入部／前編／

この学園には、『帰宅部』が存在している。もちろん、普通に部活に所属していない生徒が自動的になる帰宅部ではない。正式にはカタカナで、『キタク部』らしい。

担任が朝言っていたには、部活は強制ではないと言ったことが、ただの興味に導かれてここにいる。キタク部の部室の前に。

（キタク部。何をするとところなんだ？帰宅部よりも速く帰る部とか？）一人で考え込んでいる内に、人が近くに来ていことにまったく気づかなかった。

「もしかして、入部希望者かい？」

「あつ。イヤ、別にそういうわけではないんですけど」

突然話しかけられて少し驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻した。そういうことには慣れている。

「そうか、残念だな」

まったく残念そうな言い方をせずに言った。

「だが、少しでも見ていくがいいさ。歓迎するよ」

「えつと、じゃあ、少しだけ失礼します」

と、キタク部の部室が開かれた。——もし、過去に戻るのならこう言いたい。「そんなところに行くんじゃないと」

「二人とも、新入生が来たぞ」

中には、二人の生徒がいた。一人はおとなしそうな、女子生徒だ。もう一人は、思いつきくつろいで足を投げ出していた。まず目に付くのが、髪の色だ。茶髪。完全な茶色をしていた。あと、見た目がやけにいい、いわゆるイケメンと言うやつ。だと思う。（男の視線で見ではあるが）

「新しい人ですね。ここも狭くなりそうですね」

女子生徒のほうが言った。今気づいたのだけど、この女子は3年生らしい。

「男ですか。僕以外でここに来ようなんて、自分で言うのもなんだけれど相当変わってるね。キミは」

「どういうことだ。この人は2年生のようだ。」

「まだ、入部するわけではないらしい。残念ながら」

「そうですか。残念です、僕以外の人がよく入ったと思ったのに」

「残念です」

「しかし、ここに来たということは素質があるということだと思っ
が？」

「まあ、確かにそうですね」

「ところで、ここって何をする部なんですか？」

「根本の問題だね」

「なんか。すいません」

「いや、大丈夫だよ。部長、僕が説明しますね？」

「部室の前で後ろに立った女子生徒がどうやらこの部の部長らしい。
簡単に言つと、何もしないかな」

「えっ？」

「その言い方はあまり正しいとはいえないな」

「ですよ。何もしないわけが……」

「まあ、たいしてやることは無いのだが」

「無いのかよ!!」

「思わずつつこんだ。」

「部長。もしかしてこれは……」

「やはり、貴重な人材」

「珍しいです。あまり見ないタイプの」

『ツツコミ!!!』

3人が見事に言った。まさに、シンクロ率100%。

「な、何なんですか？」

「いや、あまりにもすばらしいツツコミだったから。少し、感動し
ちゃって」

感動って、どんなレベルのツッコミだったんださっきの？

「入部許可！！」

「いや、だから入ると決めたわけじゃないって！！」

「おめでとう。ぼくは、2年の三島^{みしまみつぎ}美月」

「わたしは、3年の北野 あかりです」

「ふっ。そして、私がこの部の部長、今井 渚。声優になるために毎日声優学校のパンフレットを見ている」

「いや、見ているだけですか」

「そう、ただ見ているだけだ」

何なんだ。この人は？もしかしてこの二人も。

「ん。僕は普通だよ」

「こいつは、どっちもいける変態野郎だ」

「どっちもって……」

一番危険な人だった。

「ふっふっふっ」

「ちなみにこっちが」

「二人のからみ。興奮してきたー！！」

「二人似てるじゃないですか」

「失礼だな。どっちもって所は重要だよ？」

「変態に変わりは無いですけど」

「まあ、この二人が変態なのは置いといて」

「一番気にするべきところな気がしますけど」

「ところで、君の自己紹介がまだだったね」

「ああ、そうでしたね」

あまりの衝撃の多さに忘れていた。

「黒崎です」

「はっ。まさか、死神か！？」

「いや、違います」

「詐欺師のほうですよ」

「そっちでもないです」

「まさかの、父の方か」

「違います。黒崎^{くろさき} 智紀^{ともき}です」

「まあ、とりあえず入部おめでとう」

「だから、入部するなんていつてないです」

「とりあえず、体験入部みたいな形でいいんじゃないかな？」

「そうね。三島君の意見の通りに体験入部を許可します」

「まだ、何も言っていないんだけども。」

「じゃあ、今日は終わりで」

「えっ。何もしてないと思うんですけど？」

「そう、言ったとおりは何もしないんだ。まあ、趣味の話をするくらい場所だな」

「あんな感じの話を毎日していると」

「入りたくなっただろう？」

「何ですか？」

「キミもこっちよりの人間だと思ったんだが」

「どちらかと言えばそうですね」

「まあ、明日いろいろ話そうじゃないか」

「そうですね。新入生が入ってくれるなんて思っていなかったの、うれしいですし、男の子だしね」

「いや、俺はそっちじゃないので」

「結局そっちよりになってしまっんですね。そうですね。」

「私は期待して待っていますから、せめて卒業までには三島君ルートに入ってください」

「久しぶりに喋ったと思ったら、意味不明なことを言わないでください」

「まあ、二人はこんな感じなんだよ。いつも通りなんだよこれが、残念ながら」

「本当に残念ですね。まあ、分かってきましたけど」

「そうか。じゃあ、明日またここに放課後集合と言うことで。」

「わかりました。体験するだけですけどね」

「それでいいよ。気に入ったら正式に入部すればいい」
「待ってるよ。僕も」
「私も二人の関係とか、気になります」
「何の話をしているんですか？」
一名、明らかに話を聞いていなかった。
「じゃあ、また明日」
「ああ、また明日な。……それと、重要なことなんだが」
「なんですか？」
「いや、明日でいい」
「気になるんですけど？」
「悪かった。なんでもない許してくれ。てへぺろ」
「てつめええええ!!」
「えっ!？」
「そのふざけた使い方は何だ!!むしろもう、あんたは使うんじゃない!!」
「えっと。分かりました」
「はあ、はあ。」
「……」
「えっと。使い方がその……」
「いや、分かったよ」
「えっ。あ、ですよ」
「キミはやっぱりこつち側だ」
「つつ。さようなら!!」
「帰っちゃいましたね」
「意外でしたね」
「まあ、そうだな。しかし、共通の話題で盛り上がれそうだ」
「そうですね」
「これからは、使い方を間違えないようにしないとな」
「それだけじゃないと思うんですけど……」
「とりあえず、今日は解散」

こうして一日目が終わった。長い日だった。

入部〜後編〜

最後の授業の終了の鐘がなり、この後のことを少し考えてみることにした。

昨日、仮ではあるがキタク部に入部した。今日もこの後に部室に行く予定だ。とりあえず、行ってから考えるか。そう思い部室の前にたどり着き、ノックをする。

「入ってます」

「微妙に間違った返答の気がするんですけど!？」

「いや、二回ノックするのは、トイレだよ」

「そんなのあるんですか？」

「聞いたことがありますね、そんなこと」

「三回ノックが正しいんだ」

「じゃあ、今度からはノックしないで入ります」

「なんで!？せつかく教えてあげたのに!！」

「それより部長は？」

「軽く流されちゃったよ」

「渚ちゃんはまだ来てないですよ」

「部長はいろいろ忙しい人だからね。ここ以外でも」

「そうなんですか？これ以外にもやることなんてあるんですか」

「一応聞くけれど、どういう意味？」

「こんな部で変なことをやっているんで暇なのかと」

「忙しいのが好きなんだよ、きつと」

そんな感じなのかな。まあ、どっちにしろこんなことやってるんだからあんまり友達とか居なそう。

「おまたせしたね。諸君」

部長が、扉を思いっきり開けて入ってきた。

「じゃあ、昨日の続きからはじめようか」

「昨日の続きって？」

「重要なことがあるといったる昨日」
「そういえば、そんなことを言っていた気がしますけど……」
「どうせ、どうでもいいことだと思っけど。」
「じつは、この部は人数が不足している!!」
「な、なんだってー」
「君が入ってくれないと、まずいことになる」
「まずいことって何ですか？」
「君を無理やり入部させることになる」
「無理やりって、何をしようとしてるんですか」
「いや、ちよつと名前をここにね。書いてもらっただけだから」
「分かりやすい詐欺だ!!」
「騙すのはやっぱりそっちが上か」
「いや、そのネタは一回だけで十分です」
「ところで二人はどうしたほうがいいと思う？」
「普通に入部してくれると思いますけど。僕は」
「私もそう思います。二人はもうすでに出来ていると思います」
「何も聞いてないでしょう。あなたは!？」
「うーん。じゃあ、入部して」
「ドストレートだ」
「どうせこつち側なんだから」
「いや、大きな壁があるはず」
「たぶんだけど、無いよなにも」
「……もうなにも言えねえ。」
「じゃあ決定で」
「ちよつ」
「早速君に頼みたいことがある!!」
「なんですか？頼みたいことって、どうせ変なことなんでしょうけど」
「いや、これは毎年やっていることなんだよ」
「毎年？そういえばただここで話しているだけじゃないんですよね

？」

「そう、今年もこの時期がやってきた」

「何をやるんですか？　と言うか何をしたんですか？　去年は」

「聞いて驚くなよ。なんと、生徒会の手伝いだ！！」

「な、なんだってー」

「大変な仕事だった」

「って、手伝って。もしかして、それだけですか？」

「僕が、覚えている限りではそれだけのはずだよ」

「それでこの部が存続できている理由が分からないんですけど」

「いろいろだよ」

「そればつかですね」

いろいろって、まあ、いろいろな変わり者が集まってはいるけれど。……そこに自分が入っているのか？　他の人から見たら。

「さっそくだが、黒崎君君は何か案が無いかい？」

「案って？　何のですか」

「どうやって生徒会の評価を上げるかだよ」

「手伝ってそういうことですか」

「はいっ」

「はい。あかりさん」

「もちろん色仕掛けです！！」

「よし、三島君任せた」

「僕がですか？」

「他に誰がいる？」

「いや、その前に色仕掛けとか高校生がやるようなことじゃないでしょう」

「そうだよな。しかも同姓同士なんて」

「なっ！？」

「そこがいいんじゃないですか！！　分かってないな」

「一番分かってないのはあなたです」

「和んでいるところ申し訳ないが」

「いや、全然和んでないですけど……」

「問題が解決する方法を思いついた」

「この会話中に思いつくことなんてくだらないことだと思いますけど、一応聞きます」

「もう一人新人部員を入れる!!」

「いや、普通に無理です」

「はい!! もう少しくらい考えても」

「そもそも、俺も部員じゃないですけどね」

「残念ながら、先ほど黒崎君は、キタク部の正式な部員になりました」

「えっ。どういう……」

「実は、勝手に提出しちゃった。てへぺろ」

「てめええええ!! しかも二重の意味で!!」

「まあ、これで最初の仕事は新人部員集めだね」

「名前だけ借りてくるでもいいんじゃないですか?」

「残念だけど。黒崎君に友達はいないから!!」

「勝手な設定を加えるな!!」

「ああ、少ないだけ?」

「ぐっ。まあ、高校入ったばかりだし、知り合いもあまりいないし

……」

「まあ、とりあえず。これはこれでおしまい」

「終わってないですけど!」

「勝手に名前を書いてくれればいいから」

「部長と同じ方法ですか」

「それじゃあ、最初の任務。新人部員を明日までに入部させること。以上」

「明日までって、聞いてないですけど!」

「今聞いたでしょ?」

「もう何を言っても無駄だよ。こうなっちゃうと」

「分かりましたよ。俺にも友達がいることを思い知らせてやります

よ!!」

「あれ、なんかいろいろ変わってるような？」

「あれ？会長と三島君のカラミ作戦は??」

そういうわけで、なんだかんだで新入部員を探すことになった。

もちろん名前だけ借りてだが。簡単にいくと思っていたのに、まさかあんな面倒なことになるなんて。

これが俺のキタク部での、最初の仕事だった。

新入部員は彼女！？

早速、名前だけでも貸してくれそうなやつらをあたってみたが、見事に全滅だった。いや、これにはちゃんとした理由があつて、見事に全員部活に入っていた。よく考えてみればこの時期にまだ部活に入っていないやつなんていないはずだ。期限の明日までに一人も集められないなんてことだけは避けたい。あの人たちに何を言われるか分からないからな……。

ここまで来たら仕方ない、切り札を出すことにした。あいつなら入ってくれるだろう。昔から知ってるし、中学は違ったけど久しぶりに会ったときに、同じ学校を受験すると知ってからまた話すようになったからな。

「確かとなりのクラスのはず……」

一人でつぶやきながらそのクラスの中を見渡すとあいつがいた。いわゆる幼馴染と呼べるあいつが。

「よう。今ちよつと言いか？」

「うん？まあ、だいじょうぶだけど？」

「さつそくだけど、俺と同じ部に入らないか？」

「いきなりすぎる展開！？」

「じゃあ、オッケーってことで」

「どこら辺でそう感じちゃった？」

「ここに名前書くだけでいいから」

「いや、だから詳しく聞かせてもらいたいんだけど」

「そつえば、あのゲームクリアしたんだけどさ……」

「うん？どのゲーム？」

「ほら、今アニメでやってるやつ」

「ばか。まさか、ネタばれする気か」

「いやー。よかったぜ。とくにあのルートが……」

「あー。なにも聞いていませんよー」

耳をふさぎながらあーあー叫んでいる。どこからどう見ても残念な子だ。

「やめてほしかったらここに名前を」

「すでに脅迫だ!？」

こんなことを普通に出来てしまうくらいの仲の良さではある。たとえ相手が女子だったとしても。

「本当に、名前だけ貸してくればいいから」

「部活って、あの変な部活っていったやつでしょ……」

実は少し、説明済みだった。どちらかというと、部長あたりと気が合いそうな感じがするから、あまり紹介しなくなかったんだけれども。

「まあ、とりあえず見てみますか」

結局俺と同じく、体験入部という形からなら入ってくれそうだ。

部室にたどり着きいきなり、

「あなたが、黒崎君の唯一の友達？」

いきなりかなり失礼なことを言ってきた。

「はい。そうです」

「つて。肯定してるんじゃない!!」

「唯一のつてあつてるじゃん。だから」

「あつてねーよ」

「でも、一人しか連れて来れなかったんじゃないと思うけど」

「しかも、女の子」

「そんな、黒崎君は三島君を捨ててしまうなんて。まさかの展開!？」

この人はもう放置。

「言っておきますけど、他はもう部活に入っていただけのことですから」

「大丈夫だよ。わかってるから」

「私は分からないけれど」

「何ですか?」

「そもそも、君が女の子を連れてくるなんて予想外すぎたけど」
「いや、こいつとは幼馴染というか、そういう関係なので」
「いろいろ知ってる関係です」
「なんかめんどくさくなりそうだから、その発言はやめようか」
「間違えました」
「なんというか。すごいな」
「一言で言えば残念なんですよ。いろいろというか、すべて？」
「すべてって、そこまで言っちゃう？」
「あ、たりなかったか？」
「そういう意味じゃないよ。たりすぎてるよ。有り余っちゃってるよ」
「よし、分かった。入部許可」
「わーい」
「って、何で喜んでるんだ！？」
「そういえば、まだ名前って聞いてなかったよね？」
「そうでした。じゃあ、まず自己紹介から」
その瞬間、嫌な感じがした。あの時と同じようなことをするんじゃないかと思ったからだ。
「私の名前は、後藤薫。普通の人間には興味ありません。とりあえず宇宙人にまずは会ってみたいです。つぎに未来人を待ってます。そして……」
「はい。以上です」
めちやくちなことになる前に止めたかったが、少し変なのが聞こえたかもしれない。
「ふっ。予想以上の上物じゃないか」
「なぜか高評価！？」
「まあ、面白そうではあるけれどね、彼女は」
「いや、全然面白くないですよ。ただ残念なだけです」
「でも、それだけだったら彼女のことを誘ったりしなかったんじゃないかな？」

「まあ、そうですね……」

「あれは面白かった。はやく次が読みたいと私に思わせるくらいに」
「アニメも良かったですけどやっぱり原作のほうが」

「やっぱり部長とは気が合ってしまっんですよね」

「だからイヤだったんだ？」

「いや、べつにそんなじゃないですから」

「どんなだよと、思ったけど二人の話が終わったところを見計ら
って」

「じゃあ、ちゃんと昨日言ったとおり俺にもちゃんと居たと言っ
とで」

「いやー、まさか彼女を連れてくるとは思わなかったけどね」

「彼女じゃねえよ。幼馴染っていったっじゃん」

「幼馴染の彼女なんですよ？」

「ちがいます！！」

「ところでここが何の部なのかは言ったのかな？」

「いや、それ俺が聞きたいくらいなんですけど」

「今、新入部員が少なくて部の存亡の危機だった。しかし、あなた
が来てくれた事によってこの部は救われる。だからここに名前を」

「はい！！」

「って、だからどんな詐欺……って簡単に騙されたやつが居た！？」

「これであなかもこのキタク部の一員です」

「まさかこんな軽音部状態になっているなんて思わなかったよ」

「ん？この学校に軽音部なんてあったか？」

「確か少し前に出来たと思うけど……」

「アニメと同時にな」

「この学校もそういう波を受けたんですね……」

「最近全国で軽音部が増えているらしい。アニメ止まりにしる、全
国の高校生。」

「じゃあ、ここも名前変えないといけないですね。キタク部！！
みたいな」

「パクリじゃねえか」

「きつと、オマージユって言うからオツケーだよ」

「全然オツケーじゃない」

「あー劇場版が楽しみだな」

完全にこつちの話を無視した。まあ、楽しみではあるけれども。

「明日からはこの5名で新生キタク部を始動させる！ー」

「新生つて言つても、人数が増えただけじゃないですか？」

「いやいや、そこがね重要なんだよ」

「まあ、確かに5人にもなれば普通の部っぽくはなりますかね？」

「どうだろう？」

まあ、確かにここは人数が集まれば集まるほどに話の内容がディープになって行きそうな気がするから、これくらいがちょうどいいのかもしれない。

「それでは、今日はこれくらいにしておくか。それではまた明日。解散！ー」

「じゃあ、帰るとしますか。って、何か忘れているような？」

「ああ、たぶん北野さんじゃないかな？」

「ああ、そういえば今回何か言いましたっけ？」

「なんか僕と黒崎君が分かれたとかそんな事を」

「じゃあ、いつも通りですね」

「まあ、そうだね」

いつもどおりに影が薄い。あかりなのに、いや、あかりだからこそなのか？

とりあえず今日、幼馴染である薫が一緒の部活に入ることになってしまった。日に日に変になっていく、主に俺の周りで。

「明日からは一緒にここに行こうね」

「分かったよ」

とりあえずそう答えておく。いつまでこのテンションのままで行けるのか？それくらいは見届けてやろうと思いつながら……今日も終わった。

私の今後の立場についての話（前書き）

この話は、番外編的な内容になっています。主役はまさかのあの人はです。

私の今後の立場についての話

わたしは今、怒っています。この部でわたしは絶対に必要な存在だと思っていました。最近になって2人も新人部員が入ってきてわたしの影がだんだん薄くなってきたような、そんな気がするのです。だから今回は一言言ってやろうと思ひまして、黒崎君を呼び出したわけなのです。昼休みに。

「それで、用件って何ですか？」

昼なのにめちゃくちゃ眠そうな目をしています。きっとさっきまで三島君との……

「呼び出しておいて一人で妄想モードに入るのはやめてください」「はっ。ごめんごめん」

「まあ、いつものことなんで大丈夫ですけど」

「今回呼び出したのは他でもないんだけど。わたしって影薄くなってきたくない？」

「今さらですか!？」

驚かれたよ!! 影の薄さにいまさら気づいたのかって。

「薄いと言つか、存在感が無いと言つか……」

「あんまり変わらないような気がするけど」

「とりあえず、妄想を減らすこと」

「えっ。いきなり死刑宣告？」

「死ぬのか? あんたは妄想しないと!!」

「死ぬ!!」

「言い切りやがった……」

たぶんじゃなくて、絶対死ぬ。妄想無しの世界なんて考えられない。ノー妄想、ノーライフ。

「とりあえず、話の途中でニヤニヤするのはやめましょう」

「ニヤニヤなんて」

「今とかしてましたけど」

「思ったことが顔に出ちゃうタイプなのか」

「いまさら自分分析ですか。遅すぎるでしょう」

「人に遅すぎる事なんて何一つ無いんだよ!!」

「ああ、確かに。そうですね、俺が先輩をまともに変えて見せますよ。手っ取り早く」

「なんだか最後の言葉には少し不安が残るけど。頼もしいです。

「とりあえずその妄想をぶち壊しましょうか?」

「いきなりハードだよ!」

「これが出来ないとなにも出来ないと思うんですけど」

「妄想無しの人生なんて……」

「はい、はい。さっき聞きましたから」

簡単に流されてしまいました。

「まあ、あの中で生きていくにはかなり濃いキャラが必要です」

「今より?」

「今なんてまさに、あつかりーん状態ですよ」

「なぜかわかりやすい!」

「すごく共感しながら観ています。

「どうしたらその状態を抜け出せるかな?」

「うーん……」

まずい本格的に、悩み始めた。昔もうちっとライトな感じの相談を渚ちゃんにしたことがあります、あやふやなまま終わったのを今思い出してしまいました。

「えっと、そんなに悩まなくても簡単なことでいいからね?」

「いや、さっきのがだめな時点ではとんどの方法が消えました」

「そんなすごいことだったの」

「もう、いつそのことこのままの状態をさらに加速させるのはどうですか?」

「えっ。それってもしかして、さらに影が薄くなったりしないよね?」

「今より下なんて無いと信じています」

「今が一番下なんだ。底辺なんだ!？」

「それはそうですね。まあ、少なくともあの部では」

「そ、そうだよ。あの部ではだよ」

「まあ、あの部で底辺って言うのはかなりまずいと思いますけどね」
「たしかに。まずいよね」

自分の部なのにひどいことを言っているような気がします。ここは許してください。

「実はもう結論は出ています」

「えっ。出てるの結論？」

「じゃあ、始めに言ってくればよかったのに。」

「それはですね……」

「それは？」

「今まで通りで行くことです」

「今まで通り？」

「そうです」

「イヤそれがだめだから相談したんだけどね？」

「むしろ先輩の唯一のキャラ要素である影の薄さが無くなったら本格的に出番無しですよ」

「それしかないの!？」

「だから今のままいい感じのところできく一言一言、言ってくればいいですから。それでこそその先輩ですから。まあ、あと……」

「うん？あと何かな？」

少しなきそうですけどがんばってこらえながら聞いてみます。もしかしたらいいことかもしれませんからね。

「はやく飯が食いたいの、ここら辺にしておこうかと思ひまして」
「うわゝゝん!!」

泣きました。さすがのわたしももう耐えられませんでした。号泣です。しかもそれ横目で見ながら黒崎君は戻っていきました。

「結局……」

結局のところ、なにも変わらずに今まで通り。ということになっ

てしまいました。

ちなみに、これを機に黒崎君と三島君のカラミの妄想が激しさを増したことは言うまでもないことです。

勉強会！？

「今日は近づいてきたあの日についてのことです」

部長が高々と宣言した。が、

「あの日？」

「深夜アニメじゃないから」

「それくらいは分かりますけど」

と言うより日じゃないしな。

「新入生の二人は分らないんだよね」

「何かイベントでもあるんですか？」

「そう、この部ではあかりと薫、君たち二人が関係している」

「私もなんだ！？」

「この二人の共通点と言えば……」

影が薄いのは一人だし、ちょっと頭が残念なのは……

「あつ。残念な二人ですね」

「残念って、いきなりひどいな」

「正解だ。さすが黒崎君だ」

「渚ちゃん？正解なの？」

「残念な二人が関係している日って何ですか？」

「テストだよ」

「テストって、期末にはまだ早いと思いますけど……」

一応まだ4月だからな。

「数週間後に迫ってきたゴールデンウィークを過ぎたら、すぐにテストがあるのだ」

「テストって俺たちにも普通にあるってことですよね？」

「ああ、だから今回勉強会を行おうと思ったのだ。さすがに二人も赤点者を出すのは生徒会への点数アップ問題にかかわるからな」

「まあ、新入部員がいきなり赤点はさすがに……」

「じつとこっちを見ているけれど実は、今のところ分からないこと

るなんてないからね」

「はい、はい」

「何、その気の無い返事は!？」

「ところでわたしも入ってるってどういうこと？」

「あかりは毎年、危険ラインから抜け出せていないからな今年は楽に行きたいからな」

「一応受験生だから勉強してるんだけど……」

「それよりも、俺は置いておいて二人はどうなんですか？」

「自分を置いておいて聞くんだ？」

「私はもちろん余裕だ」

「それは部長は余裕だと思いますよ。今年も」

「部長って勉強できるんですか？」

「知らなかった？部長はね、2年連続で学年トップなんだよ」

「トップって、しかも2年連続……」

「まあ、普通だよ。これくらい」

「すごすぎる。部長のスペックがやばい。やばすぎる。何でこんな部をやってるんだ？やっぱ、頭のいい人は考えてることが良く分からないな。うん。まあ、あんまり、分かりたくもない気がするけど。」

「ちなみに、2番目が生徒会長なんだ」

「会長が2番目って!!もしかしてそのことで目を付けられているんじゃない？」

「さすがにずっと2番目だとね」

「ずっとってもしかして、2年間ですか？」

「ああ、一度も譲ったことはないな」

「絶対にそれが原因で目を付けられているんだと……」

「だから、適当に点数アップをしているんだ」

「もしかしてそれすらも嫌味とかに思われているんじゃない。」

「あいつのことはこれくらいでいいだろう？」

「ただ嫌いなだけなのか？」

「じゃあ、残念な二人のための勉強会を始める!!」

「残念って、さっきから言いすぎだよ!？」

「まあ、実際に残念だから仕方ないでしょう」

影が薄くて残念って、すごいな。でも、これで今回もメインなんだからなにもなくても自然に話すことも多くなるだろうな

「じゃあ、まずは英語からだが」

「英語って、暗記科目じゃないんですか？」

「アルファベットから教えようと思ってな」

「まさかそんなに出来ないんですか!？先輩!？」

「何でわたし!？さすがにそれくらいは分かるよ」

「いや、まあそれくらいは分かりますよね。二人とも」

「いや、何それくらい分かっているだろうと思っていたがな、もちろん」

「当然だよな。渚ちゃん。同じクラスだもんね」

「同じクラスなのになんか微妙な関係な気がするんだけど」

「そこに踏み込んだじゃだめだよ。さすがに……ねっ、黒崎君」

「あつ。そうですよね。すみません」

「えっ、なにその反応心配しなくても大丈夫だよ!？」

「なにも言わなくてもいいですよ」

「ところでこれなんだが」

「おもいつきり無視してますけど!？」

「まさか本当だったなんて……面白半分で言っただけなのに」

「ほ、本当なの。もしかして、ねえ、渚ちゃん」

「うん？まあ、友達だと思うが？」

「良かったですね。先輩、友達一人居て」

「うん。本当に良かった、って一人じゃないよ」

「じゃあ、勉強開始だ」

「本当だよ!!本当にちゃんと居るからね」

結局その日だけということにはならず、しっかりと継続して勉強会をしている。もちろん二人の為だけに。

「ゴールデンウィークの予定だが」

「このまま勉強会ですか？」

「うーん。どうしようかと思ってな」

「もう、いいんじゃないかと」

「まだ、不安だと思うよ！？」

「自分で言っちゃうのかよ」

「ゴールデンウィークも勉強会で決定みたいですな」

「そうだな。それでは、前半は遊ぶから後半に集中して勉強するぞ
！！」

「自分が遊びたいのか……」

「渚ちゃんも受験生のはずなのに」

「まあ、部長は大丈夫だと思っけどね」

「それでは、今日も適当に勉強開始だ！！」

「適当なのかよ！！」

その通りにゴールデンウィークまでは、適当に勉強して、休みに
入った。

「まさか、後半って言うのが最後の一日だけとは、想像してません
でした」

「たまっていたアニメを見ていたら今日になっていた」

「まさか、寝てないんですか？」

「じゃあ、勉強会を始めるぞ！！」

「部長がやばい目をしている！？」

「とりあえず部長を少し休んでいてくださいな」

「そうか。それならさっそくあと少しくリアのゲームを……」

「いや、だからもう寝てるよ！！」

そんな感じで結局ゴールデンウィークは終わった。

テストの結果はもちろん言うまでもなかった。

第一回キタク部会議

今日は何かの会議をやるらしい。なぜか靴箱に手紙が入っていた。少しドキッとしたのは内緒の話だが。

いつも通りの時間に部室に行くと、すでに自分以外の部員が集まっていた。

「今日は言ってある通りに、大切な会議がある！！」

「それで、どんな会議ですか？」

「その名も……」

「その名も？」

「って言うか、引っ張るところなのか？ここ。」

「第一回キタク部会議だ！！」

「な、なんだってー」

そのまますぎる。そのまますぎるネーミング、さすが部長。

「じゃあさっそく始めるぞ」

「急ですね」

「まずは、その残念な二人から。意見はあるか？」

「ぐっ」

残念な二人というのはもちろんあの二人だ。

「意見ってこう言う会議って前もやってませんでしたか？」

「今回はしっかりとした部になったからな」

「じゃあ、今までは……」

「まあ、副会長だから少しぐらい強引なことできるんだよ」

「副会長？」

「会長なら知ってるけど……副会長って誰だっけ？」

「私が副会長だよ」

「は？」

「部長が生徒会副会長」

「そんなことはどうでもいい。それよりも何かないのか？」

「どうでもいいことなんかじゃないですけど。まあ、自分で何かあるからこんな会議をしてるんですよ？」

「まあ、そうだな」

「じゃあ、どうぞ」

「ずばり、副部長を決めたいと思う」

「副会長ってこの部のですよね？」

「当たり前のことを聞くんだな」

「必要なんですかね？このキタク部に」

「もちろん必要だ。三島君ならば副会長、つまり来年の部長でもいいと思ってるよ」

「そ、そこまで評価してもらってたんですか……」

副会長になるってことは、来年の部長になってしまう。地獄だな。いや、切り抜けられる方法がある。

「ここは最高学年である二人が部長、副部長でいいと思いますけど」「ぼ、僕も賛成ですね。来年の部長については残りのメンバーで決めますので」

「私は、まだ入ったばかりなので……」

「って、私に決定なんですかー？」

「よかったじゃないですか。目立ちまくりですよ」

「全然よくないよ。今までまったく目立たなかったのに、急に目立つ立場になると何したらいいのか分からないよ……」

「安心しろ。もちろん私がすべて教えるぞ。一からな」

「じゃあ、決定と言うことで」

「一回目の会議がこれほどにまでうまくいくとさすがに思わなかったぞ」

「まあ、当分二回目が来ないことを祈ってますよ」

「ふっ。どうだろうっかな？」

「えっ。本当にもう決定なの!？」

「これでこの部も安泰ですね」

「うん。そうだね」

「二人とも棒読みになっていますよ」

「そんな指摘できるのはやっぱり先輩しか居ません」

「実はツツコミの素質があつたんですね」

「違うツツコミなら想像するけど」

「と言うわけで、副部長に決定です」

「急に戻してきた!!」

「これで今日は終わりだな。よし、解散」

部長は、めちやくちや嫌な笑い方をして今日の会議の終わりを告げた。

「本当に決定しちゃったの？本当に？」

一人まだぐだぐだ言っている人が居たが、みんな無視して行つた。

6月について

「さあ、ようやく副部長も決まったところで」

「本当にこのままいくだなんて……」

この前の会議で決まった副部長は現実を認めていないようだった。

「まだ何かあるんですか？」

「6月、それは戦いの月だ!!」

「戦い？6月には別にこれといった行事はないと思いますけど？」

「6月には、休みがない!!」

「……………」

「確かにそうですね。祝日が一日もありませんね。でも、戦いというのは？」

「毎日が戦いだ」

どこの名台詞だ！？つつこまないけど。

「夏休みもあるからそれくらいは……」

「夏休みもどうせ勉強だ」

「受験生なんだから当然でしょう」

「あかりは遊び続けるそうだよ」

「急に来たけどそんなこと言ったこともないよ!？」

「この人のこと別にいいでしょう。どうしても」

「どうしてもよくないよ!？」

「確かにどうでもいいかもしれないが、夏休みに急に毎日遊び続けたらサボリ癖がつくだろう!？」

「そ、それはそうかもしれないですけど」

「と、言うことでちよくちよく遊ぶ」

「夏休みの前に遊びの準備運動みたいな感じですか？」

「まあ、そんな感じだ。微妙なたえではあるが」

そこは触れちゃいけないところだろ……。自分でも感じているだけに、きつい。

「じゃあ二回目を始めるか」

「二回目って何のですか？」

「キタク部会議第二回だ！！」

「はやっ。もう二回目！？」

「議題はもちろん。どう遊ぶかだ！？」

「実にくだらない議題のもと会議が始まった。」

「でも6月は梅雨ですからあんまり遊べるものってないような気がしますけど」

「ここで遊べるものにするか」

「部室で、ですか。じゃあ、僕は読書を」

「なんか普通ですね」

「この部だからあえて普通のをね」

「普段から何か読んでるんですか？」

「うーん。やっぱり、ライトノベルがほとんどかな」

「部長は好きそうですけどね。マンガとかラノベとか」

「ああ、むしろラノベしか読まない。普通の小説なんて読んだことがない！！」

「何でそこで力を入れる！？」

「私も小説ってあんまり読みません」

「じゃあダテめがねなんですネ、それ」

「ひどい。というか、なんか急に冷たい」

「じゃあ、読書で決定だな」

「それでいいんですか？部長」

「ああ、読書だ。一人づつ音読をしてもらうがな」

「きたー。三島君と黒崎君のアレなやつ音読……」
「なんかすごい怖いこと言ってる。」

「音読ってなんか授業みたいだ……」

「かなりくさいセリフを全力で言ってもらっ」

「いや、それ部長もやるんですよね？」

「ああ、当然だ」

「黒崎君、部長は一応声優志望だからね？」

「そういえばそうだった。なにもしてないと思っていたらまさか、こんな練習をしていたなんて。」

「まあ、今回が初めてだがな」

「予想通りでした！！」

「さっそく幻想を殺してしまったな」

「いや、全然面白くないですから」

「ところであかりは何を読んだ？」

「いや、ここで副部長に振らなくてもいいですから」

「もちろん……」

「はい。どうもありがとうございます」

「急に扱いがひどくなってきた？」

「と言うより会議なんて意味が無いと思うんですけど」

「なぜだ？」

「どうせなにも変わらずにどうでもいい子と話して終わりだと思うので」

「まあ、僕もそうなるとは思っけどね」

「そこは言っちゃダメなところなんだよ」

「副部長は黙っていてください」

「あうっ」

「そうなるかもしれないが、なにも考えないよりもまだろう」

「なにも考えてないじゃないですか。常に」

「いや、さすがにそれは言い過ぎなんじゃ……」

「とりあえず、黒崎君は居残りだな」

「な、居残りって!？」

「もちろん説教だ」

「あ、今日は少し用事が……」

「そうか、それなら明日2時間コースだな」

「今日で大丈夫です」

「それじゃあ、僕たちは帰るから」

「逃げるんですか？」

「いや、居残りは黒崎君だけだから……」

「そうです。副部長は帰ってもいいんです」

「そうですね。副部長はいいですよ。さようなら」

「だから扱いが……！」

「まあ、僕も帰るね」

「ぐっ、本当に帰ってしまった」

「さあ、それじゃあ今日は、3時間コースにしておこうか？」

「だ、騙されたー」

結局、その説教は見回りに来た先生が来るまでやっていた。それは、ちょうど3時間だった。

男二人の……

そう言えばこの部に入ってから不思議だと思っていたことがある。それは、三島先輩のことだ。あの二人はまあ、同じ学年だし、副部長のほうは友達だと思ってるらしいけれど、三島先輩との共通点がよく分からない。どうしてこんな部について、自分もその部の一員になっちゃったんだが。

「何か考え事？」

「あ、先輩」

ちようど、三島先輩に会ったので聞いてみよう。邪魔なものも居ないし。

「少し考えていたんですけど……」

「なんだい？」

「どうして、この部に入ろうと思ったんですか？」

「ああ、僕が何でこのキタク部に入ろうと思ったかってこと？」

「はい。少し気になってしまいました」

「うん。大丈夫だよ。まあ、たいした理由なんて無いんだけどね」

「やっぱり部長に拉致されたとか、そんな感じなんですか？」

「いや、そんな犯罪じみたことは無かったけど……」

少し安心。実は、ありえると思っていた。

「逃げ込んだところがたまたまキタク部だったんだ」

「逃げ込んだ？」

「そう」

「何から逃げていたんですか？」

「女の子たちから」

「……えつと？」

「なんか、入学当初すごい人気があつたみたいで、それで」

そういえば、かなりのイケメンなんだよな。今はもうただの変態じみた人にしか見え無いけど。

「うらやましい悩みですね」

「そうでもないと思うけどね」

「キヤーキヤー言われて、追いかけてまわされて、アイドルみたいじゃないですか」

「まあ、そのときは2次元のほうに興味があつたから大丈夫だったよ」

「なんかさらつと、すごいこといった気がするんですけど」

「今になつてはもう全部オツケーだよ」

「なにも聞いていません」

「いや、むしろなにも聞きたくない。っていうか、やっぱり変態だった。」

「うん。じゃあ、話を戻すけど逃げ込んだ先がキタク部だったんだ」

「それは聞きました」

「そこに部長が居ればもう……分かるよね？」

「結局、俺と大して変わらない感じですか……」

「いろいろ相談に乗るよ？一応先輩だから」

「もう、人生最大クラスの失敗をやらかしたんで大丈夫です」

「そう、じゃあ、安心だ」

「俺が来る前はどんな感じだったんですか？」

「いや、今とほとんど変わらないよ」

「変わるでしょう。ツツコミが居ないんですから」

「まあ、そこは二人で部長にツツコミを入れてたけどね」

「ずいぶんと不安な」

「正直ね」

「夏休みとかはどうしてたんですか？」

「それは、内緒で」

「な、なんですか？」

「楽しみは取っておかないとね？」

「いや、全然楽しみじゃないんですけど。むしろ、怖くて聞いたんですけど……」

「まあ、すぐに分かるんじゃないかな？楽しみに待ってるといいよ」
「だから、楽しみじゃないんですよ！！」

「じゃあ、1つヒントを」

「ヒントですか？」

「そう、1つだけね」

「なんですか？」

「夏休みの宿題は、すぐに終わらせたほうがいいよ」

「宿題？」

「そう。部長はそういう性格だからね」

「最初に終わらせてあとは全部遊ぶってことですか？」

「うん。部長はね」

「まあ、でも今年は受験生だからそんなことは無いと思いますけど」

「だいいいね」

「本当にそうだといいですけどね」

「まあ、去年は最初の一日と最後の一日以外遊び続けていたからね」

「……冗談ではなく？」

「もちろん」

普通にありえるからな、あの部長さんなら。むしろよく二日も休みがあつたなつてレベル。

「今年は休みが増えるといいね」

「そうなることを願ってますよ」

「うん。それじゃあまた放課後に」

「はい」

とりあえず、どちらにしろ早めに宿題は終わらせておいたほうがいいな。今回はかなり重要なことを聞いた。副部長とは違って、本当の無駄話にはならない。

まあ、とりあえず今出来るのは……。

「部長が勉強していてくれますように」

そう祈ることだけだった。

しりとり！？

「さあついに6月だ！！」

「なぜかテンション高いですね？」

いつもの何割が増して部長のテンションが上がっている気がする。

「それよりさっそくしりとりをしようじゃないか」

「急にしりとりですか？！」

「まずは、私からしりとの、『り』」

「りんご」

「いろいろ言いながらもやつちやうんだよね。黒崎君は」

「うるさいですよ。先輩。次ですよ」

「いや、これは2人だけの真剣勝負だ！！」

「ただのしりとりなのに？！」

「ゴマ豆腐。さあ、『ふ』だ」

「そついうのもアリですか？二日酔い」

「まだ未成年だろう？」

「いやただのしりとりですよね？」

「いか」

「急に普通になりましたね」

「さあ、もう降参してもいいんだぞ」

「さすがにはやいと思いますけど、それに『か』なんて難しくも無いですし」

「4、3」

「カウントダウンが始まっている？！」

「2」

「カラス」

「ギリギリだぞ。まったくそんなに難しかったか、まあ仕方の無いことだな私は昔からしりとりでは負けたことが一度も無いからな」

「制限時間があるなんて聞いてなかったんですけど」

「うん？そうだったか？しかし、スリルが少しは合ったほうが楽しめるだろう？」

制限時間以内に言えなかったらどんなことされていたのか、とりあえず簡単なのでよかった。

「ところで、6月も意外といいことが分かった」

「あれ！！しりとりは？」

「そのいいこととは何ですか部長？」

「ああ、三島君。今何のアニメを見ている？」

「完全に無視されている。もしかして負けたことが無いんじゃないかと最後までやりきったことが無いだけなんじゃ」

「アニメですか？まあそれなりには見ていますけど」

少し見ていないだけで、ここでの話しについていけない時があるからな。主に一人の人が暴走して話し始めるから。

「6月はちょうど終わりの時期だろう」

「ああ、今やつてるアニメが終わるんですね？でもそれだったらいいことにはならないんじゃない？」

「甘いな、黒崎君。実に甘いな、まるでそう。あれのように！！」

「あれというのは……？」

「7月からの新アニメがもうすぐだと思つて寝ていられないんだよ」

「また、無視された……」

「でも、部長。3ヶ月ごとに新しくなったりするんじゃない？」

「ああ、もちろん毎回テンションが上がっているぞ。それよりも今年は秋が楽しみだ」

「7月はどうなったんですか！？」

「まあ実は毎回楽しみなのは変わらないのだが」

「ただアニメが好きなのだけってことじゃないですか」

「一言で言えばそう言うことになる」

結局ものすごく簡単な形に収まったな。

「アニメ以外では何か楽しみなものはないんですか？部長」

「以外と言われると、そうだな。特に無いな」

「答え出るの早すぎでしょう……」

「そういえば体育祭が夏休み明けにありますよね」

「そんな先のことを言って何になるんだ三島君？」

「そうですね」

「体育祭って何か他の学校とは違うことでもするんですか？」

「いや、他とそれほど変わらないと思う」

「まあ、こちら辺では夏休み明けでやるのがうちの学校くらいだからあえて挙げるとすれば、それくらいじゃないかな？」

「今はもう休みを待ってその後のことは考えない」

「部長は嫌いなんですか？」

「別に嫌いと言っわけではないが、面倒なだけだ」

「それでも、3年なんですから」

「ん？そつだが、何かあるのか？」

「いや、最後なんですよ？高校生活最後の体育祭なんですよ？」

「そついうのは受け付けていないので、よくわからないな」

「俺の中学では最後だからって、女子がすごい熱くなっていたんですけど……」

「いいことなんじゃないかな？まあ、僕もあまり興味ないけれどね
まあ、体育祭で燃えるよな人だったらこんな部に入っていないよな
それはそつだ。聞いたほうが馬鹿でした。

「そのあとに文化祭もあるんだよ」

「文化祭？そつちにはやる気があるんですか？」

「もちろんだよ。黒崎君」

「部長。なんか怖いんですけど……」

「なんか後ろに、ゴゴゴゴつて文字が見えそつな迫力を出している。
もちろん見えないけれど。」

「やつと部として認めてもらえたんだ、今年は暴れさせてもらつぞ」

「まあ、ほどほどにお願いしますね」

「ああ、そつだな。今から熱くなつてもしょうがないからな。安心
したまえ三島君」

安心できないんですけど。だって、全然はなし聞いてないじゃん。
「ふう、やっと作業終了しました。と言うわけで、私もしりとり参戦いたしますー！」

「あかり、今まで何をしていたんだ？」

「ちよっとした読書を」

「薄めの本が何冊かおいてあるんですけど。これですか？」

「そう、それだよ。黒崎君」

こんなところでこの人は何をしているんだ。まったく。

「そうか。分かった。それじゃあ、あかりからだ」

「最初はもちろん、しりとり『り』です」

「リムジン」

「ん。ん？えっと、渚ちゃん？」

「ああ、私の負けだ。さすがあかりだ。じゃあ今日は終わりにするか。それではまた明日」

「え？渚ちゃん？すごい棒読みだったよ。声優目指すんだったらもつとちゃんとしないと」

突っ込むところそこかよ。

「えっと、それじゃあまた明日」

「さようなら」

「え？み、皆さん帰っちゃうんですか？でも、『ん』でもまだ続けられるんですよ！？」

「ああ言ってますけど、どうします？」

「部長が終わりって言っただから、今日はもう終わりと云うことで」

「まあ、そうですね。それが一番いいですよね」

「そう、『ん』が最初に来る言葉があるんですよ。知らなかったでしょうね。だから教えてあげます。それは、『ンジャメナ』です！」

と言う、今までいたんだというくらい影の薄い人の叫び声が後ろから聞こえていた。

夏休み目前

ついに夏休みを目前に迎えた今日。いつも通りに部活に集まっていた。そのとき、

「夏休みの予定が決定したぞ!!」

「よかったですね。旅行でもするんですか?でも、受験生なんですから少しくらいは……」

「君は何を言っているんだ?キタク部の休みの予定だぞ」

「は?」

「去年よりは軽くしてるんですか?部長」

「いや、去年と同じくらいだな」

「去年つてもしかして前に言ってた、ほとんど休みが無かったって言う……」

「そうだよ。それと同じ位だって言うんだったら休みは無いんじゃないかな」

高校最初の夏休みが部活尽くめか。文字だけ見たらなかなか青春してるんだけどな。

「まず、最初の一週間でこの町を制覇する」

「いきなり意味不明すぎる!?!」

「そして次だが……」

「その前に制覇って何なんですか?!」

「質問は一切受け付けない!!」

「横暴すぎる!!」

「次の週は、これからここで決めようと思う」

「ここで決めるってどういうことですか?」

「そのままの意味なんだが?」

「いや、だって夏休みの予定は部長が勝手に決めたんじゃ?」

「その週だけはみんなにも意見を貰おうということを決めただ」

「それじゃあ、休みで」

「もちろん却下だ」

「ちよつと待ってください。そうすると宿題はいつやればいいんですか？」

「貰った瞬間で終わらせろ」

「そんなこと絶対に無理だ！！」

でもこの人の場合は本当にやってそつだ。

「とりあえず最初の制覇って言うのは何をするんですか？」

「まあしかたないな、そこから話すか」

「いきなり変なことはしないんですよね？」

「この町の遊べる場所すべてに行つて、遊びつくすこと。それが、制覇と言ふことだ！！」

「よかった。割とまともで……」

「いや、黒崎君全然まともじゃないと思うけれど」

「つて、そつですよ。部長！！最初の一週間で制覇って無理でしょうどう考えても！！」

「不可能を可能にするそれが私たちだ。そう教えたはずだが？」

「アレをやると言ふんですか？」

「ああ、そつだ。そのための今までの活動だからな」

「くくく、ついにこれで……」

「さあ、存分に奮いたまえ諸君」

「もついいですか？部長？」

「ああ、少しの余興としてはある程度楽しめたよ」

「そつですか。それにしても意味不明の妄想が……」

「ノリノリだったじゃないか。黒崎君」

「部長には負けますけどね」

「当然だ」

「一応声優を目指しているんですからこれくらいは軽いですよね？」

「ん？ああ、そう言えばそんなことも言ったか」

「いや、それってどう言ふことですか？まさか、嘘だったんですか？」

まあ確かにやってることが普通の声優好きのやってることと同じだからな。

「イヤそれは本当だ」

「そうだよ、黒崎君。昔から渚ちゃんは言っていたんだから本当だよ」

「まあそんな嘘ついても仕方ないですからね」

「さあ、話を戻して予定を決めようか」

「と、言うかもうその次の週やることをその週で話すことになりそうですねこのままだと」

「それはいいかもしれないな。じゃあ、それでいこうか」

「え？決定ですか？もしかして」

「いや、いい意見をありがとう。さすが黒崎君だ」

「そんなほめられ方全然うれしくないんですけど」

「じゃあ、その方向で行くんですね？部長」

「ああ、そうだな。決定だ。遊んでいればいい案も思いつくだろうな」

そういうことで、夏休みも変わらずに活動することが決まった。内容はいつもと同じになりそうだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2740v/>

俺の帰宅部生活

2011年11月14日03時33分発行